

# トポス

alg-d

[http://alg-d.com/math/kan\\_extension/](http://alg-d.com/math/kan_extension/)

2018年5月5日

## 1 トポス

定義.  $P, Q: C^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$  を関手とする.  $P$  が  $Q$  の部分関手 (記号で  $P \subset Q$  と書く)  
 $\iff$  自然変換  $\theta: P \Rightarrow Q$  で「各  $a \in C$  について  $\theta_a: Pa \rightarrow Qa$  が包含写像になっているもの」が存在する.

$P \subset Q$  を部分関手とすると, 自然性より,  $f: a \rightarrow b$  に対して次の図式が可換である.

$$\begin{array}{ccc} a & Pa & \xrightarrow{\subset} Qa \\ f \downarrow & Pf \uparrow & \uparrow Qf \\ b & Pb & \xrightarrow[\subset]{} Qb \end{array}$$

従って  $Pf = Qf|_{Pb}$  となる. 特に  $x \in Pb$  に対して  $Qf(x) \in Pa$  である.

逆に  $Q: C^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$  を関手として, 集合族  $\{Pa\}_{a \in C}$  が次の条件を満たすとする:

- $a \in C$  に対して  $Pa \subset Qa$ .
- $f: a \rightarrow b$ ,  $x \in Pb$  に対して  $Qf(x) \in Pa$ .

このとき,  $f: a \rightarrow b$  に対して  $Pf := Qf|_{Pb}: Pb \rightarrow Pa$  と定義すると  $P$  は  $Q$  の部分関手になることが容易に分かる.

定義. 有限完備な圏  $C$  の部分対象分類子 (subobject classifier) とは, 組  $\langle \Omega, \text{true} \rangle$  であって, 以下の条件を満たすものをいう:

- (1)  $\Omega \in C$  は対象で,  $\text{true}: 1 \rightarrow \Omega$  は射である.

(2) 任意のモノ射  $f: a \rightarrow b$  に対して, ある射  $\chi_f: b \rightarrow \Omega$  が一意に存在して, 次の図式が pullback になる.

$$\begin{array}{ccc} a & \xrightarrow{!} & 1 \\ f \downarrow & & \downarrow \text{true} \\ b & \xrightarrow{\chi_f} & \Omega \end{array}$$

true を省略し, 単に  $\Omega$  を部分対象分類子ということも多い.

定義. トポス (topos)<sup>\*1</sup>とは, 圏  $E$  であって以下の条件を満たすものをいう:

- (1)  $E$  は有限完備である.
- (2)  $E$  は Cartesian 閉である. (「随伴関手」の PDF を参照.)
- (3)  $E$  は部分対象分類子を持つ.

命題 1.  $C$  を小圏とするととき  $\widehat{C} = \mathbf{Set}^{C^{\text{op}}}$  はトポスである. 特に  $\mathbf{Set}$  はトポスである.

証明. まず  $\widehat{C}$  は完備だった (「極限」の PDF を参照).  $\widehat{C}$  が Cartesian 閉であることを示す.

※  $P, Q \in \widehat{C}$  とする. もし  $\widehat{C}$  が Cartesian 閉であれば  $Q^P \in \widehat{C}$  が存在するが, このとき米田の補題により,  $a \in C$  に対して

$$\text{Hom}_{\widehat{C}}(y(a) \times P, Q) \cong \text{Hom}_{\widehat{C}}(y(a), Q^P) \cong Q^P(a)$$

とならなければならない.

$P, Q \in \widehat{C}$  とする.  $Q^P := \text{Hom}_{\widehat{C}}(y(-) \times P, Q) \in \widehat{C}$  と定義する. 余米田の補題 (「余米田の補題」の PDF を参照) により  $Pa \cong \int^{c \in C^{\text{op}}} \text{Hom}_C(a, c) \times Pc$  だったことに注意

<sup>\*1</sup> 以下で述べる Grothendieck トポスと区別する為に, この意味のトポスを初等トポス (elementary topos) という場合がある. また, Grothendieck トポスを単にトポスと呼ぶ場合もある.

すると、任意の  $X \in \widehat{C}$  に対して自然に

$$\begin{aligned}
\mathrm{Hom}_{\widehat{C}}(X, Q^P) &\cong \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Xc, Q^P(c)) \\
&= \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Xc, \mathrm{Hom}_{\widehat{C}}(y(c) \times P, Q)) \\
&\cong \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}\left(Xc, \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(\mathrm{Hom}_C(d, c) \times Pd, Qd)\right) \\
&\cong \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Xc, \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(\mathrm{Hom}_C(d, c) \times Pd, Qd)) \\
&\cong \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Xc \times \mathrm{Hom}_C(d, c) \times Pd, Qd) \\
&\cong \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Xc \times \mathrm{Hom}_C(d, c) \times Pd, Qd) \\
&\cong \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}\left(\int_{c \in C^{\mathrm{op}}} Xc \times \mathrm{Hom}_C(d, c) \times Pd, Qd\right) \\
&\cong \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}\left(Pd \times \int_{c \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_C(d, c) \times Xc, Qd\right) \\
&\cong \int_{d \in C^{\mathrm{op}}} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Set}}(Pd \times Xd, Qd) \\
&\cong \mathrm{Hom}_{\widehat{C}}(X \times P, Q)
\end{aligned}$$

である ( $\mathbf{Set}$  が Cartesian 閉なので、 $Pd \times -$  が余極限と交換すること、特にコエンドと交換することに注意する)。よって  $\widehat{C}$  が Cartesian 閉と分かった。

部分対象分類子の存在を示す。  $\Omega$  を

- $a \in C$  に対して  $\Omega(a) := \{P \in \widehat{C} \mid P \subset y(a)\}$  とする。
- $f: a \rightarrow b$  を  $C$  の射として  $P \in \Omega b$  とする。  $u \in C$  に対して

$$(\Omega f(P))(u) := \{k: u \rightarrow a \mid f \circ k \in Pu\}$$

と定めるとこれは部分関手  $\Omega f(P) \subset y(a)$  を与える。

∴)  $l: u \rightarrow v$  とする。  $k \in (\Omega f(P))(v)$  に対して  $k \circ l \in (\Omega f(P))(u)$  を示せばよい。今  $k \in (\Omega f(P))(v)$  だから  $f \circ k \in Pv$  である。  $P \subset y(a)$  が部分関手だ

から

$$\begin{array}{ccc}
 u & Pu & \xrightarrow{\subset} \text{Hom}_C(u, a) \\
 \downarrow l & \uparrow -ol & \uparrow -ol \\
 v & Pv & \xrightarrow{\subset} \text{Hom}_C(v, a)
 \end{array}$$

が可換となり、よって  $f \circ k \circ l \in Pu$  である。

これにより、 $f: a \rightarrow b$  に対して写像  $\Omega(f): \Omega b \rightarrow \Omega a$  が定まる。

で定義する。これは関手  $\Omega: C^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$  を与える。

$\therefore$  明らかに  $\Omega(\text{id}_a) = \text{id}_{\Omega a}$  だから、 $a \xrightarrow{f} b \xrightarrow{g} c$  に対して  $\Omega(g \circ f) = \Omega(f) \circ \Omega(g)$  を示せばよい。定義より  $P \in \Omega c$ ,  $u \in C$  に対して

$$\begin{aligned}
 (\Omega f \circ \Omega g(P))(u) &= \{k: u \rightarrow a \mid f \circ k \in (\Omega g(P))(u)\} \\
 &= \{k: u \rightarrow a \mid g \circ f \circ k \in Pu\} \\
 &= (\Omega(g \circ f)(P))(u)
 \end{aligned}$$

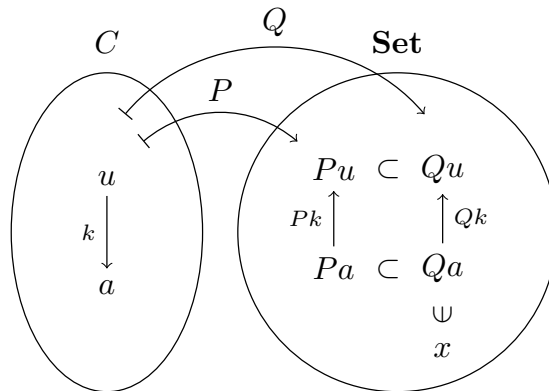
だから  $\Omega f \circ \Omega g(P) = \Omega(g \circ f)(P)$  である。

true:  $1 (= \Delta 1) \Rightarrow \Omega$  を  $\text{true}_a(*) := y(a)$  で定める。これらが部分対象分類子を与えることを示そう。

まず  $\theta: P \Rightarrow Q$  をモノ射とする。つまり  $a \in C$  に対して  $\theta_a: Pa \rightarrow Qa$  はモノ射 (つまり単射) である。これにより  $Pa \subset Qa$  とみなす。  $a, u \in C$ ,  $x \in Qa$  に対して

$$\chi_a(x)(u) := \{k: u \rightarrow a \mid Qk(x) \in Pu\}$$

と定義する。



これは部分関手  $\chi_a(x) \subset y(a)$  を定義する。

∴)  $l: u \rightarrow v$  を射とするとき,  $k \in \chi_a(x)(v)$  に対して  $k \circ l \in \chi_a(x)(u)$  となることを示せばよい. それには  $Qk(x) \in Pv$  ならば  $Q(k \circ l)(x) \in Pu$  を示せばよいが, それは明らか.

$$\begin{array}{ccc}
 u & Pu \subset Qu & \\
 l \downarrow & Pl \uparrow & \uparrow Ql \\
 v & Pv \subset Qv & \\
 k \downarrow & Pk \uparrow & \uparrow Qk \\
 a & Pa \subset Qa & 
 \end{array}$$

よって  $\chi_a(x) \in \Omega a$  であるから,  $\chi_a: Qa \rightarrow \Omega a$  は写像である. これは自然変換  $\chi: Q \Rightarrow \Omega$  を定める.

∴)  $f: a \rightarrow b$  を射とする. 次の図式が可換であることを示せばよい.

$$\begin{array}{ccc}
 a & Qa \xrightarrow{\chi_a} \Omega a & \\
 f \downarrow & Qf \uparrow & \uparrow \Omega f \\
 b & Qb \xrightarrow{\chi_b} \Omega b & 
 \end{array}$$

即ち,  $x \in Qb$  に対して,  $y(a)$  の部分関手の等号  $\chi_a(Qf(x)) = \Omega f(\chi_b(x))$  を示せばよい. つまり  $u \in C$  に対して  $\chi_a(Qf(x))(u) = \Omega f(\chi_b(x))(u)$  を示す. これは定義より

$$\begin{aligned}
 \chi_a(Qf(x))(u) &= \{k: u \rightarrow a \mid Qk(Qf(x)) \in Pu\} \\
 \Omega f(\chi_b(x))(u) &= \{k: u \rightarrow a \mid f \circ k \in \chi_b(x)(u)\} \\
 &= \{k: u \rightarrow a \mid Q(f \circ k)(x) \in Pu\}
 \end{aligned}$$

となるから成り立つ.

よって  $\widehat{C}$  における次の図式が得られた.

$$\begin{array}{ccc}
 P & \xrightarrow{!} & 1 \\
 \theta \downarrow & & \downarrow \text{true} \\
 Q & \xrightarrow{\chi} & \Omega
 \end{array}$$

これは可換である.

∴)  $a \in C$  に対して  $\chi_a \circ \theta_a = \text{true}_a \circ !_a$  を示せばよい. 即ち  $x \in Pa$  に対して

$\chi_a(\theta_a(x)) = y(a)$  を示せばよい.  $\chi$  の定義より,  $u \in C$  に対して

$$\chi_a(\theta_a(x))(u) = \{k: u \rightarrow a \mid Qk(\theta_a(x)) \in Pu\}$$

だから, 任意の  $k: u \rightarrow a$  に対して  $Qk(\theta_a(x)) \in Pu$  を示せばよい. それは  $\theta: P \Rightarrow Q$  が自然変換だから, 次の図式が可換となり成り立つ.

$$\begin{array}{ccc} Pu & \xrightarrow{\theta_u} & Qu \\ Pk \uparrow & & \uparrow Qk \\ Pa & \xrightarrow{\theta_a} & Qa \end{array}$$

この図式が pullback になることを示す. その為に次の図式の実線部分が可換であるとする.

$$\begin{array}{ccccc} X & & & & \\ \sigma \downarrow & \overset{!}{\curvearrowright} & & & \\ & P & \longrightarrow & 1 & \\ & \downarrow \theta & & \downarrow \text{true} & \\ & Q & \xrightarrow{\chi} & \Omega & \end{array}$$

$a \in C$  とすると,  $\chi_a \circ \sigma_a = \text{true}_a \circ !_a$  だから  $x \in Xa$  に対して  $\chi_a(\sigma_a(x)) = y(a)$  である. 即ち任意の  $k: u \rightarrow a$  に対して  $Qk(\sigma_a(x)) \in Pu$  となる. 特に  $k = \text{id}_a$  と取れば  $\sigma_a(x) \in Pa$  が分かる. 即ち, ある  $\tau_a: Xa \rightarrow Pa$  が存在して  $\theta_a \circ \tau_a = \sigma_a$  となる. この  $\tau_a$  は自然変換  $\tau: X \Rightarrow P$  を与える.

∴)  $f: a \rightarrow b$  を  $C$  の射として次の図式を考える.

$$\begin{array}{ccccc} Xa & \xrightarrow{\tau_a} & Pa & \xrightarrow{\theta_a} & Qa \\ Xf \uparrow & & \uparrow Pf & & \uparrow Qf \\ Xb & \xrightarrow{\tau_b} & Pb & \xrightarrow{\theta_b} & Qb \end{array}$$

$\theta$  が自然変換だから, 右側の四角は可換である. また  $\sigma_a (= \theta_a \circ \tau_a)$  が  $a$  について自

然だから外側の四角も可換である。従って

$$\begin{array}{ccc}
 Xa \xrightarrow{\tau_a} Pa \xrightarrow{\theta_a} Qa & & Qa \\
 \uparrow x_f & = & \uparrow Q_f \\
 Xb & \xrightarrow{\tau_b} Pb \xrightarrow{\theta_b} Qb & = \\
 & & \uparrow P_f \\
 & & Pa \xrightarrow{\theta_a} Qa \\
 & & \uparrow P_f \\
 & & Xb \xrightarrow{\tau_b} Pb
 \end{array}$$

となる。今  $\theta_a$  はモノ射だったから

$$\begin{array}{ccc}
 Xa \xrightarrow{\tau_a} Pa & & \\
 \uparrow x_f & & \uparrow P_f \\
 Xb \xrightarrow{\tau_b} Pb & & 
 \end{array}$$

が可換となることが分かり、 $\tau$  は自然変換である。

よって  $\theta \circ \tau = \sigma$  となる自然変換  $\tau: X \Rightarrow P$  が存在することが分かった。

逆に  $\tau': X \Rightarrow P$  が  $\theta \circ \tau' = \sigma$  を満たすとすると、 $\theta$  がモノ射だから  $\tau' = \tau$  とならなければならない。よってこのような  $\tau$  が一意であることが分かる。従ってこの図式が pullback であることが分かった。  $\square$

## 2 層

$X$  を位相空間、 $\mathcal{O}(X)$  を  $X$  の開集合全体とする。  $\mathcal{O}(X)$  は包含関係により圏となる。関手  $P: \mathcal{O}(X)^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$  を  $X$  上の (集合の) 前層というのであった。更に、開集合  $U \subset X$  と  $U$  の開被覆  $\{U_i\}_{i \in I}$  に対して次が equalizer となるとき、 $P$  を層と言うのであった。(「例: 位相空間上の層」の PDF を参照。)

$$P(U) \xrightarrow{e} \prod_{i \in I} P(U_i) \begin{array}{c} \xrightarrow{p} \\ \xleftarrow{q} \end{array} \prod_{i, j \in I} P(U_i \cap U_j)$$

ここで  $e(x) := \langle x|_{U_i} \rangle_{i \in I}$  で、 $p$  は  $U_i \cap U_j \subset U_i$  から得られる射、 $q$  は  $U_i \cap U_j \subset U_j$  から得られる射である。

定義.  $C$  を圏とする。  $a \in C$  に対して、部分関手  $S \subset y(a)$  を  $a$  上の sieve という。

例 2.  $C = \mathcal{O}(X)$  の場合。  $S$  を  $U \in \mathcal{O}(X)$  上の sieve とすると  $S$  は関手  $\mathcal{O}(X)^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$

で,  $V \in \mathcal{O}(X)$  に対して

$$S(V) \subset y(U)(V) = \text{Hom}_{\mathcal{O}(X)}(V, U) = \begin{cases} 0 (= \emptyset) & (V \not\subset U \text{ のとき}) \\ 1 (= \{*\}) & (V \subset U \text{ のとき}) \end{cases}$$

である. よって  $S$  は写像  $\mathcal{O}(X) \rightarrow 2 = \{0, 1\}$ , 即ち部分集合  $S \subset \mathcal{O}(X)$  とみなせる. 更に,  $S$  が関手であることから  $W \subset V$  に対して写像

$$\text{Hom}_{\mathcal{O}(X)}(V, U) = S(V) \rightarrow S(W) = \text{Hom}_{\mathcal{O}(X)}(W, U)$$

が存在する. 故に  $V \in S$  (即ち  $S(V) = 1$ ) ならば  $W \in S$  (即ち  $S(W) = 1$ ) でなければならない. また  $V \not\subset U$  ならば  $V \notin S$  である. 以上により,  $U$  上の sieve  $S$  は部分集合  $S \subset \mathcal{O}(U)$  で, 条件

$$V \in S, W \in \mathcal{O}(U), W \subset V \implies W \in S \quad (1)$$

を満たすものと同一視できる.

$\{U_i\}_{i \in I}$  を  $U$  の開被覆とする. 即ち  $U = \bigcup_{i \in I} U_i$  である. このとき

$$S := \{V \in \mathcal{O}(U) \mid \text{ある } i \in I \text{ が存在して } V \subset U_i\}$$

と定義すれば  $S$  は明らかに条件 1 を満たすので,  $S$  は  $U$  上の sieve とみなせる. この  $S$  は  $U = \bigcup_{V \in S} V$  を満たす.

逆に,  $U$  上の sieve  $S$  が  $U = \bigcup_{V \in S} V$  を満たすとする

$$S = \{V \in \mathcal{O}(U) \mid \text{ある } W \in S \text{ が存在して } V \subset W\}$$

となる. そこで,  $U = \bigcup_{V \in S} V$  となる sieve を covering sieve と呼ぶ. □

$U$  上の sieve  $S$  は部分関手  $\theta: S \Rightarrow y(U)$  であった. これにより, 前層  $P$  に対して写像  $i := \text{Hom}_{\widehat{\mathcal{O}(X)}}(\theta, P): \text{Hom}_{\widehat{\mathcal{O}(X)}}(y(U), P) \rightarrow \text{Hom}_{\widehat{\mathcal{O}(X)}}(S, P)$  が定まる.

**定理 3.** 位相空間  $X$  上の前層  $P$  が層

$\iff$  任意の開集合  $U \subset X$  上の covering sieve  $S$  に対して

$$i: \text{Hom}_{\widehat{\mathcal{O}(X)}}(y(U), P) \rightarrow \text{Hom}_{\widehat{\mathcal{O}(X)}}(S, P)$$

が全単射を与える.



証明.  $\{U_i\}_{i \in I}$  を開被覆とする.

$$E \xrightarrow{\subset} \prod_{i \in I} P(U_i) \xrightleftharpoons[q]{p} \prod_{i, j \in I} P(U_i \cap U_j)$$

を  $p, q$  の equalizer とすると  $E := \left\{ \langle x_i \rangle_{i \in I} \in \prod_{i \in I} P(U_i) \mid x_i|_{U_i \cap U_j} = x_j|_{U_i \cap U_j} \right\}$  である.  
 $S$  を  $\{U_i\}_{i \in I}$  から定まる covering sieve とする. このとき全単射  $f: \text{Hom}(S, P) \rightarrow E$  が存在する.

$\therefore \theta \in \text{Hom}(S, P)$  とする.  $S(U_i) = 1 = \{*\}$  だから  $\theta_{U_i}(*) \in P(U_i)$  である. よって写像  $f: \text{Hom}(S, P) \rightarrow \prod_{i \in I} P(U_i)$  を  $f(\theta) := \langle \theta_{U_i}(*) \rangle_{i \in I} \in \prod_{i \in I} P(U_i)$  と定義することができる.  $f(\theta) \in E$  である.

$\therefore i, j \in I$  に対して  $\theta_{U_i}(*)|_{U_i \cap U_j} = \theta_{U_j}(*)|_{U_i \cap U_j}$  を示せばよい.  $\theta$  が自然変換だから

$$\begin{array}{ccc} S(U_i \cap U_j) & \xrightarrow{\theta_{U_i \cap U_j}} & P(U_i \cap U_j) & & S(U_i \cap U_j) & \xrightarrow{\theta_{U_i \cap U_j}} & P(U_i \cap U_j) \\ \uparrow & & \uparrow & & \uparrow & & \uparrow \\ S(U_i) & \xrightarrow{\theta_{U_i}} & P(U_i) & & S(U_j) & \xrightarrow{\theta_{U_j}} & P(U_j) \end{array}$$

は可換である. よって  $\theta_{U_i}(*)|_{U_i \cap U_j} = \theta_{U_i \cap U_j}(*) = \theta_{U_j}(*)|_{U_i \cap U_j}$  となり成り立つ.

よって  $f: \text{Hom}(S, P) \rightarrow E$  とみなすことができる. この  $f$  の逆写像  $g$  が存在することを示せばよい.

$\langle x_i \rangle_{i \in I} \in E$  とする.  $V \in \mathcal{O}(X)$  に対して  $\theta_V: S(V) \rightarrow P(V)$  を次のように定める:

- $V \notin S$  のとき,  $\theta_V$  は一意な射  $S(V) = \emptyset \rightarrow P(V)$  とする.
- $V \in S$  のとき,  $V \subset U_i$  となる  $i \in I$  を取り  $\theta_V(*) := x_i|_V$  と定める.

( $x_i|_{U_i \cap U_j} = x_j|_{U_i \cap U_j}$  だから, これは well-defined である.)

これは  $V$  について自然である.

∴)  $V \subset W$  に対して次の図式が可換であることを示せばよい.

$$\begin{array}{ccc} S(V) & \xrightarrow{\theta_V} & P(V) \\ \uparrow & & \uparrow \\ S(W) & \xrightarrow{\theta_W} & P(W) \end{array}$$

$W \notin S$ , 即ち  $S(W) = \emptyset$  ならば自明だから  $W \in S$  とする. この場合  $V \in S$  であるから,  $\theta_W(*)|_V = \theta_V(*)$  を示せばよい. これは  $x_i|_W|_V = x_i|_V$  ということだから成り立つ.

よって自然変換  $\theta: S \Rightarrow P$  が得られる. これにより  $g(\langle x_i \rangle_{i \in I}) := \theta$  と定義する. つまり  $V \in S$  に対して  $g(\langle x_i \rangle_{i \in I})_V(*) = x_i|_V$  である. このとき

$$\begin{aligned} (g \circ f(\theta))_V(*) &= (g(\langle \theta_{U_i} \rangle_{i \in I}))_V(*0) = \theta_{U_i}(*)|_V = \theta_V(*) \\ f \circ g(\langle x_i \rangle_{i \in I}) &= \langle g(\langle x_i \rangle_{i \in I})_{U_i} \rangle_{i \in I} = \langle x_i \rangle_{i \in I} \end{aligned}$$

だから  $g = f^{-1}$  である.

よって  $f: \text{Hom}(S, P) \rightarrow \prod_{i \in I} P(U_i)$  とみなせば

$$\text{Hom}(S, P) \xrightarrow{f} \prod_{i \in I} P(U_i) \begin{array}{c} \xrightarrow{p} \\ \xrightarrow{q} \end{array} \prod_{i, j \in I} P(U_i \cap U_j)$$

は equalizer である.

次の図式を考える.

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}(S, P) & \xrightarrow{f} & \prod_{i \in I} P(U_i) \begin{array}{c} \xrightarrow{p} \\ \xrightarrow{q} \end{array} \prod_{i, j \in I} P(U_i \cap U_j) \\ \uparrow i & & \uparrow e \\ \text{Hom}(y(U), P) & \xrightarrow{\cong} & P(U) \end{array}$$

この図式の左の四角は可換である.

∴)  $\theta \in \text{Hom}(y(U), P)$  を取る.  $\theta$  に対応する  $x \in P(U)$  は  $x = \theta_U(\text{id}_U)$  で与えられるから,  $\theta$  を右回りで写したものは  $\langle \theta_U(\text{id}_U)|_{U_i} \rangle_{i \in I}$  になる. 一方, 左回りで写すと

$f \circ i(\theta) = \langle \theta_{U_i}(\ast) \rangle_{i \in I}$  になるから  $i \in I$  に対して  $\theta_U(\text{id}_U)|_{U_i} = \theta_{U_i}(\ast)$  を示せばよい。  
 $\theta$  が自然変換で  $U_i \subset U$  だから次が可換である。

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}(U_i, U) & \xrightarrow{\theta_{U_i}} & P(U_i) & & \ast & \xrightarrow{\theta_{U_i}} & \theta_U(\text{id}_U)|_{U_i} \\ \uparrow & & \uparrow & & \uparrow & & \uparrow \\ \text{Hom}(U, U) & \xrightarrow{\theta_U} & P(U) & & \text{id}_U & \xrightarrow{\theta_U} & \theta_U(\text{id}_U) \end{array}$$

よって  $\theta_U(\text{id}_U)|_{U_i} = \theta_{U_i}(\ast)$  が分かる。

( $\implies$ )  $S$  を開集合  $U \subset X$  上の covering sieve とする。  $\{V\}_{V \in S}$  は  $U$  の開被覆であるから、上記の議論により次の図式を得る。

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}(S, P) & \xrightarrow{f} & \prod_{V \in S} P(V) & \xrightarrow[p]{q} & \prod_{V, W \in S} P(V \cap W) \\ \uparrow i & & \uparrow e & & \\ \text{Hom}(y(U), P) & \xrightarrow{\cong} & P(U) & & \end{array}$$

仮定より  $e$  が equalizer となるから  $i$  は同型である。

( $\impliedby$ )  $\{U_i\}_{i \in I}$  を  $U$  の開被覆とする。これから得られる covering sieve  $S$  を取り、上記の議論から次の図式を得る。

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}(S, P) & \xrightarrow{c} & \prod_{i \in I} P(U_i) & \xrightarrow[p]{q} & \prod_{i, j \in I} P(U_i \cap U_j) \\ \uparrow i & & \uparrow e & & \\ \text{Hom}(y(U), P) & \xrightarrow{\cong} & P(U) & & \end{array}$$

$i$  が同型だから  $e$  が  $p, q$  の equalizer となる。よって  $P$  は層である。 □

これを使い、一般の圏  $C$  上の前層が層であることを定義することができる。その為には、まず  $c \in C$  上の sieve  $S$  がいつ covering sieve になるかを定めなければならない。

定義.  $C$  を圏とする。各対象  $a \in C$  に対して、 $a$  上の sieve からなる集合  $J(a)$  が与えられ、以下の条件を満たすとき、 $J$  を  $C$  の Grothendieck 位相という。

- (1)  $y(a) \in J(a)$  である。 ( $y(a)$  を maximal sieve と呼ぶ。)
- (2)  $f: a \rightarrow b$ ,  $S \in J(b)$  に対して  $\Omega f(S) \in J(a)$  である。

(3)  $S \in J(a)$ ,  $R$  が  $a$  上の sieve で「任意の  $f \in S(b)$  に対して  $\Omega f(R) \in J(b)$ 」ならば  $R \in J(a)$  である.

また  $J(a)$  に含まれる sieve を covering sieve と呼ぶ. 圏  $C$  の Grothendieck 位相  $J$  が与えられたとき, 組  $\langle C, J \rangle$  を景 (site) という.

定義. 景  $\langle C, J \rangle$  上の層とは, 前層  $P: C^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$  であって, 任意の  $c \in C$  と  $S \in J(c)$  に対して  $i: \text{Hom}_{\widehat{C}}(y(c), P) \rightarrow \text{Hom}_{\widehat{C}}(S, P)$  が全単射となるものを言う.  $\langle C, J \rangle$  上の層全体がなす  $\widehat{C}$  の充満部分圏を  $\text{Sh}(C, J)$  と書く.

例 4.  $C = \mathcal{O}(X)$  の場合.  $J(U) := \{S \mid S \text{ は } U \text{ 上の covering sieve}\}$  と定義すると  $J$  は  $\mathcal{O}(X)$  の Grothendieck 位相になる.

∴ maximal sieve, 即ち  $S = \mathcal{O}(U)$  は  $U$  上の covering sieve であるから条件 1 は成り立つ.

次に  $f: U \rightarrow U'$  として  $S$  を  $U'$  上の sieve とする.  $V \in \mathcal{O}(X)$  に対して

$$(\Omega f(S))(V) = \{k: V \rightarrow U \mid f \circ k \in S(V)\}$$

だから

$$V \in \Omega f(S) \iff V \subset U \text{ かつ } V \in S$$

である. よって条件 2 は「 $S$  が  $U'$  上の covering sieve ならば  $S \cap \mathcal{O}(U)$  は  $U$  上の covering sieve である」という条件となり, 成り立つ.

最後に,  $S$  を  $U$  上の covering sieve,  $R$  を  $U$  上の sieve とする. 条件 3 の「任意の  $f \in S(b)$  に対して  $\Omega f(R) \in J(b)$ 」は「 $V \in S$  ならば  $R \cap \mathcal{O}(V)$  は  $V$  上の covering sieve である」という条件になり, この条件が成り立つとき  $R$  は covering sieve である, というのが条件 3 である. 故に成り立つ.

この景  $\langle \mathcal{O}(X), J \rangle$  上の層は, 定理 3 より位相空間  $X$  上の層となる. □

定理 5.  $\text{Sh}(C, J)$  はトポスである. □

定義. ある景  $\langle C, J \rangle$  に対する  $\text{Sh}(C, J)$  と圏同値になる圏を Grothendieck トポスと呼ぶ.

## 参考文献

[1] S. Mac Lane and I. Moerdijk, Sheaves in Geometry and Logic, Springer, 1992